

どんな働き方
を望む？

渡り鳥のように

そのとき一番気持ちのよい場所で働きたい。

働く場所、働き方を変えると効率も上がる。

それができる社会になってきた。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

生きるために働き続けてきた時代が遂に終わり、人間は何のために生きるのか、何をして生きていくのかが問われる時代になるだろう。

食べていくために必要な労働以外の、自分なりの価値を見出すための労働がこれから増えていくだろう。

人が一番輝いているときは、自分の好きなことを楽しんでいるとき。

やりがいを
追求できる
社会へ

日本人は仕事をしすぎなので、楽しく生きようという一言につきる。

どうやって生きていけばいいかわからない中では、一つに的を絞らずに、何個も可能性を持っている方がよい。

これからの時代は、やりがいや楽しいことが大事。みんながやりがいを追求する社会になっていくはず。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

今の若者が求めているのは、役立つ仕事、充実感のある仕事、自分が成長できていると感じられる仕事だ。

若い人に定年まで同じ企業で働くという意識はない。できる限りソーシャルな取組に関わりたいという思いが強く、そうした方向で雇用の流動化が進む。

労働参加率を上げるという観点の議論ではなくて、いかに自分らしく働くかという観点で議論しないとイケない。

いかに
自分らしく
働くか

仕事の評価軸が時間から成果に変わり、1日8時間労働の世界が終わる。1日3時間で仕事を済ませる人は、それ以外の時間で別のことをするようになる。

所得を上げることよりも、所得が低くても幸せな生活を志向する若者が増えているのは間違いない。その意味で自分時間の拡大、ワークライフバランスなどが一層大事になってくる。

今の若い人は出世というよりは平穩に自分のペースで仕事をして自分の時間を大切にする暮らしを望む人が多いかもしれない。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

今は生活のために働く感覚が大きいですが、これからは人生を楽しむために働くという世界観になっていってほしい。

みんなが勝手に楽しむ権利、楽しむ自由を持っている。その自覚のない人があまりにも多い。

人々が自由に選べる仕事の選択肢は思っているよりもずっと広い。

人生を
楽しむために
働く

フルで働き続けたいといけない社会は望まない。社会で活躍することもできるし、自由に生きることもできるという選択の幅を持たせるべき。

みんながやりがいをもって社会参加し、みんなが社会に貢献していける、そのような社会づくりが進んでいるのではないか。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

在宅勤務が一般化すれば、地域のコミュニティとの関係性が重視されるようになるだろう。

働き方が自由になれば、田舎暮らしも増える。

リモートワークは普遍的な働き方。これが広がれば、いろいろな人がもっと能力を活かせるようになる。やっと進みだした。決して元に戻してはいけない。

テレワーク
前提の働き方
が一般的に

中小企業もテレワークできるようになってほしい。

働く＝出社するではない働き方が普通になってほしい。

残業が美德という人が、これまでは多かった。リモートを活用して効率的な働き方が広がってほしい。

週休3日制になれば新しいことをしやすくなる。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

好きな場所で好きな人と仕事をする。それが一番ストレスフリーなのではないか。

自分の望む場所で仕事ができれば、人生の選択肢は広がる。

働く場所を変えることで、働き方のメンテナンスを行うことができる。

好きな場所で
好きな人と
仕事をする

軸になるような自分の役割—例えば歯科医という役割—を持ちながら、他のいろんな役割と組み合わせていけるようにすることが大事だろう。

一斉に通勤、一斉に休暇という習慣はなくなってほしい。労働時間でなくジョブ（職務内容）による給与が定着してほしい。

多様な働き方ができ、一人ひとりにあうそれぞれの働き方改革で、豊かな生活を実践できる社会づくりが大切だ。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

働き方の大変革が必要。一斉就職をやめて、若者がいろんな経験しながら仕事を選んでいける社会にすべき。

親が自営業の学生が少なく、サラリーマン以外の選択肢が見えていない学生が多い。

サラリーマン社会では組織に入ると、基本的に自分で意思決定してはいけないということを学ぶ。

サラリーマン
以外の仕事を
選択肢を

今の学生にとっては、同じ企業に勤め続けることよりも、そこでどんなキャリアを築けるのか、どんな生活ができるのかが重要。

バラバラな個人を社会に結びつける機能が職業にはあったはず。しかし、今の学生は、社会のためというより、会社のために働くという感覚が強い。

個人の意識の切り替えは速いのに、組織では慣性の力が働き、変化に時間がかかる。その結果、脱組織化が進んでいる。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

組織に属さない個人の活動が、
いろんなネットワークの中で展
開される世界になっていく。

会社員になること以外の選択が
できる環境づくりが大事。

一つの組織に縛られると考える
力が衰える。

フルタイムの働き方は将来なく
なってほしい。

組織に
縛られない
働き方へ

副業が広がれば会社に依存しな
くてよくなる。

組織に忠誠を誓う組織人から、
職業に忠誠を誓う職業人の時代
になっていくだろう。

今起きているのは組織に背を
向ける動き。勢いのある人ほど
組織に属さないで活動する。

当社は従業員ゼロ。目的に共感
してくれる人とチームを組んで
仕事している。それで十分。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

組織と個人の関係が希薄化し、個人がフリーな状況に向かう。その人がどんな資本を持っているかがこれから一層重要になる。

一つの場所で生まれ育って一つの職場でキャリアを重ねていくよりも、一人の人生の中で、いろんな場所でいろんなライフスタイルを経験できたらいい。

自由になる働き方では、能力開発が重要。大事なのは、学びと活動の循環である。

大事なのは
学びと活動の
循環

終身雇用制度があるから能力が向上し続けられない。

正規非正規の格差がない雇用を促進すべき。

男女ともに派遣・契約社員などの不安定な非正規雇用の増加が食い止められ、年齢を問わず、希望者が正社員になれる社会になってほしい。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

失業した人がすぐに就労できる環境や、職業訓練のような場を充実していくこともセーフティネットとして重要だ。

スムーズに職業の転換ができるような再教育の仕組みがある社会になってほしい。

リスタート
する人を
受け入れる
社会づくり

機械化が進んだが労働時間は減っていない。AIに仕事を奪われても、また新しい仕事が生まれると考える方が自然だ。

職業訓練や新しい仕事への転換のハードルを下げる仕組みなど、リスタートする人を応援する社会づくりが進んでほしい。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

時間を金に換え、その金で地域や家族の機能を外部化する。これでは仕事から逃げられない。これからは逆に生活費を下げて、働く時間をどこまで小さくできるかに挑戦する人たちが出てくるだろう。

家族のあり方は労働のあり方と切り離せない。日本の家族の問題は、日本の長時間労働の問題とセットで考えるべきだ。

いろんな
ライフスタイル
を考える

仕事はもちろんだが、趣味、人のつながり、地域活動など、いろんなものを含めたうえで、ライフスタイルを考えていく必要がある。

リタイアすると、生きがいがなくなってしまう人が多い。仕事でなくても、趣味でもよいので、何かに打ち込めることが必要。

シニアが働くのはいいが、もっとわがままに働ければいい。新隠居、半隠居、半休半業など、戦略を練る必要がある。

I 自分らしく生きられる社会

1 自由になる働き方

働き方も住まいも、ずっと一か所という社会ではなくなっていくと、人に情報のタグをつけ出すだろう。

住む所と働く所が一つになり、しかも場所に規定されなくなる。好きな場所を転々として暮らす人が増えるだろう。

仕事を選ぶと自動的に住む場所が決まる時代から、どういう場所に住み、どういう暮らしをしたいかを考えて、それに合った仕事を選ぶ時代になる。

多様性に
富んだ兵庫の
好きなところで
働く

皆が多様性に富んだ兵庫県の好きなところで働き、充実した家庭生活を送っている。

ライフステージに合わせて働く場所、住む場所を選べる社会になってほしい。移動がもっと簡易に迅速にできるようになれば、仕事や住居の選択肢が増え、より豊かな生活が送れる。

働き方や家族のあり方、会社や学校ありきではなく、どこにいても働き、学べる環境が必要。

居場所は
なぜ必要？

家族のそばで暮らす人も、

離れて暮らす人も、家族がいない人も、

それぞれがつながり、地域に居場所があると

安心感を得られる。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

自分の居場所を探しても100%合うものは見つからないので、自分で居場所をつくった方が早い。

自力でサードプレイスを確保できない若者と高齢者の居場所確保が公共の役割として重要。

高齢者と働く世代がともに活用できる複合的なサードプレイスをつくる必要がある。

いつでも
気軽に行ける
場所が身近に
あればいい

身近に人が集まれる場所が必要。月一回とかではなく、いつでも気軽に行ける場所が身近にあればいいと思う。

自由に自分自身が出せるくつろぎの居場所が持てると、精神的なゆとりが生まれて、人生をより豊かに過ごすことができる。

一人で寂しい。人と気軽に話せる場所がほしい。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

地域で人が集まれる場所をもっと増やし、コロナ禍で過密と感じた公園の状態が緩和され、公園を選べるまちづくりを望む。

公共施設が充実しており、コワーキングスペースや多目的スペース、ヨガなどの運動が自由にできる広場がある。

自宅に代わる一人時間を楽しめる場所として、マンスリーマンションをシェアする都会別荘や、キャンプ場、バーベキュー場などの貸し切るができる場所が増えてほしい。

地域に人が
集まれる場所
をもっと
増やす

商店街、市場はもはや物を売るだけの場所ではなく、コミュニケーションを楽しむ場所だと思う。

廃校や歴史的建造物をおしゃれにリノベーションした大規模なコワーキングスペースを設置する。1つの拠点に様々なフリーランス、ビジネスマン、クラフトマンが集まり、イノベーションが創出される。

まちの中にいろんな交流の場があれば、そこから思いもよらないつながりが生まれていく。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

孤独・孤立の当事者の状況にもっと目を向けないといけない。制度が届かない人、制度はあっても情報が届かない人、情報が届いても行動に移せない人が山ほどいる。

地域のつながりが薄くなることで、地域の中で困っている人が見えにくくなっている。

マンションに引っ越したら、地域とつながるきっかけがないまま一年が過ぎた。

人を孤立
させない
環境をつくる

孤立無援にならないように、元気なうちから趣味を持ち、会社以外に居場所を作る努力を個々人がすべき。

人の温かさを体感できる場、人を孤立させない環境を自分たちが暮らす地域でどう作っていくかということ、もっとみんなが考えないといけない。

人と人との結びつきが希薄になり、殺伐とした社会になってきている。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

働きながら一つでも何か仕事以外の活動をするのが、歳を取って別の動きをしていくときに生きてくる。

釣り、ゴルフ、キャンプ、シーズンスポーツなど、趣味を持つ人々が快適に暮らすことができ、同じ趣味を持つ人とも交流できる地域になれば、住みたい人が増える。

新しい
つながりが
生まれる場
をつくる

これからのつながりは、全人格的なものではなく、もっとフレキシブルな緩いつながりをイメージした方がよい。

大事なのは昔あったつながりを再生することではなく、新しいつながりを作ることだ。新しいつながりが生まれる場をあちこちに作っていくことが大切だ。

狭い関係性の中で安定してしまうのではなく、つながることには不安もあるが、面白さ、楽しさもあるとわかる環境をどう作っていくかが課題。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

地域にいろんな人が育ってきているのに、それが見える化されていない、誰とやったらいいかわからないという人が多い。

趣味から新しいコミュニティができる。そんな新しいコミュニティのつながりがこれから先、自助に頼らない社会をつくることにつながっていくのではないか。

つながる意味は何か。大事なのは「連帯」であり、人と人のつながりが課題解決の力を生むというところが大事なポイントだ。

自分たちが
楽しいことを
やることが
大事

人は楽しいことしかやりたくない。自分も楽しくなければやっていないし、楽しくあるべきである。

自分たちが楽しいことをやることが大事で、良い雰囲気を作れたら、そこに人が集まってくる。

都市の地域コミュニティを元気にするためには、若者にとって、関わるのが面白い、新しいことを学べる、新しい知り合いができる、そんなコミュニティに変えていく必要がある。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

新しい人が入ってきた時に受け入れていくような交流のできる場所があったらよい。

価値観を共有する人たちと作るオンライン上での結びつきが、その人にとってのリアルなコミュニティになっていくだろう。

バーチャルなコミュニティは敷居が低く、オンラインなら参加できるという人もいる。

オンライン上
の結びつきが
リアルな
コミュニティに

最新のテクノロジーは、SNSを含むバーチャル的な新時代のつながりに加えて、旧来の人間同士のつながりさえも生み出す鍵となる。

自分らしさを見つけたり身につけたり、他者との関わりの場を増やすことが、自分らしさを増大させることにつながる。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

サードプレイスを持つことで、異質な人と共に過ごす力、自律的に活動できる力などを養うことができる。心身のリフレッシュ、自己肯定意識の向上が期待でき、孤独感の解消にもつながる。

折れない心や強い心のもとになる「心理的資本」はコミュニティの中で多く蓄積される。心理的資本を育む場となる「サードプレイス」の存在が重要になる。

つながろうと
意識する

人と出会うこと、人と話すこと、家族がいること、誰かと一緒に過ごすことの大切さをもっと学ぶ機会を持つことが必要。

地域にはいろいろな考えの人がいるので、いろいろな人が入って来やすいように間口の広いフラットな場を作る必要がある。

つながろうと意識している人が多い地域には、自然とつながりが生まれる。つながりがあれば不安が減り、不安の少ない地域には人が集まる。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

縁を増やすにはたくさんの人と
関わる機会を増やすしかない。

どのようにすれば自分も相手も
気持ちよくつながれるか、つな
がり方を学ぶことも大切。

出会いがきっかけで、新しい価
値観が生まれたり、自分らしく
生きることができるようになる。

お互いに
興味、関心を
持ち合える

縦や横につなぐ。世代をつなぐ、
場所をつなぐ。同じ世代で共通
するものでつながる。何かきっ
かけをつくるとつながりやすい。

お互いに興味、関心を持ちあえ
る社会になることが大切だと思
う。いくら素晴らしい技術や素
敵な施策ができて、お互いの
関心がなければ成り立たない。

人間的なつながりが重視される
社会をめざす。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

子育てが落ち着いたら、地域の
子どもの学習支援や子ども食堂
などの活動で地域とつながって
いきたい。

若者もしっかり自分の将来のこ
とや、地域のことを考えている。
地域の中に多世代での交流の機
会があることも大事だ。

保守的なシニア層が若者を潰す
という話もよくある。若い人が
何か新しいことをしようとする
と、まず地域のシニアとの軋轢
が起こる。

一歩
踏み出せる
場をつくる

地域で活動したい若者は確実に
増えているが、固定的な考え方
を持つ声の大きい人の意見で進
んでしまう地域がまだまだ多い。

関係を広げる場はすでにくら
でもあるわけなので、一歩踏み
出せる環境をどう作るかが大事。

使っていない土地などを広場や
公園にし、誰もが楽しく参加で
きるスポーツイベントやバザー
などができれば、多世代が交流
する場となる。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

NPOは、事業をする以外に、参加者にとって居場所になるという意味がある。

人間同士の支え合いが生きている地域が強いとわかっているからこそ、ボランティア活動を大事にする必要がある。

今の若者はつながりがありすぎの中で維持不要の関係は何かという「引き算」で世界を見ている。捨象される部分に地域やNPOが入らないようにしないといけない。

NPOは
参加者にとっての
居場所

NPOの本質は非所有であり、みんなが参加するということ。通常会社と違って効率性で動く組織ではないことを認識する必要がある。

NPOは住民が組織する団体である。市民のニーズを吸い上げる機能を担っており、その存在自体に価値がある。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

地域で活動するということは人とのつながりを作ることだ。

公民館が担ってきた社会教育の活性化を通じて、地域のコミュニティを再構築する方向を考えるのが現実的だ。

いろんなサイズのコミュニティが重なり合って補い合う形を作ることが大切。

コミュニティ
に新しい価値
を持たせる

地域コミュニティは、地縁型からクラブチーム型に変わっていくだろう。多様な人が多様な関わりを持てるデザインが必要だ。したい、したくないという選択もできるようにすべきだ。

田舎でも魅力的だと思ったら帰ってくる。コミュニティを再構築して新しい価値を持たせることが課題になってくる。

人口減少下の地域づくりは「つくること」よりも「つぶすこと」から進めるべきだ。骨組みだけ残して新しい活動をしやすい体制に変えていくことが大事。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

自治会が非常に封建的。権利意識の強い人も多く、新しい展開をしたがらない。そんな場に、若い人や街に働きに出ている人は出てこない。

地縁組織の支援は、外から変えようとするのではなく、中からもっとよくしたいという気持ちを引き出していくことが大事だ。

緩やかなつながりが大事なのに「誰がトップだ」「規約はどうなっている」とうるさく言う人がいる。地域に若手が参加しないのは、そういうのがしんどいからではないか。

風通しのよい
地域に若者は
集まる

自治会、まちづくり協議会が何をやっているのか、外から見えないところが大半。そういう地域は見えないままになり、見えやすいところに若者が流れる。

活動したい若者が増えているが、閉鎖的な地域が多く、若者を引きつける地域とそうでない地域の二極化が起こっている。

地域活動のベースは自治会ではなくなってきている。そもそも自治会に入っていない若い人が多く、自治会に入らずに地域活動をしている人も多い。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

世帯単位ではなく、個人単位で参加できる自治協議会の立ち上げを進めているが、若い人が入ってくると、「若い者が生意気を」という人もいて、なかなか難しいところもある。

年配の方々は、ボランティアが来てくれない、と言って悩んでいるが、労働力として使われたくないという若者の気持ちも分かる。

ポイントは
楽しむこと

ボランティアだとしても、お金じゃなくても何か得るものを持って帰りたいという思いを叶えてあげないとお互い悲しい結末になる。

ポイントは楽しむこと。住民の参画と言っても、住民に義務感や使命感を求めるだけでは限界があって、地域離れが進む。

自治会長や民生・児童委員のなり手がいない。地域の希薄化が進み、自治会の組織率も下がってきている。自治会を解散したいという相談が毎年ある。

I 自分らしく生きられる社会
2 居場所のある社会

消防組織すら維持できない。集落内の地域活動が困難。

事業所数が年々減っており、商工会の加入率も下がっている。

コミュニティの単位は、いろいろ試したが、やはり小学校区が一番よい。

地域に
コミュニティ
がなく断絶感
がある

若者や外国人には自治会はミステリアスな存在。女性の役が仕事だと免除されないみたいな変なルールがある。地域の側も変わらないといけない。

地域にコミュニティがなく、断絶感がある。

学校の統廃合により地域社会の分裂が進む。

どんな交流
を望む？

五国を横断する、

人と人とのリアルな交流や関わりが

あってこそ、兵庫県として存続する

意義がある。

I 自分らしく生きられる社会
3 世界へ広がる交流

但馬は芸術の街、播磨は医療の先端を走る街、丹波は世界に誇る農業の街、淡路は日本のサテライトオフィスの街、摂津は異文化の街として新たな魅力創出につなげる。

地域にはそれぞれ強みがある。地域間で競争するのではなく、手を組んで世界の中で有名な兵庫になるくらいの気持ちでやっていく方が楽しい。

いろいろな
地域カラー
を持つ県

いろいろな地域カラーを持っているのが兵庫県のすごさ。都会もあれば、山も海もある。

何もないのではなく見えていないだけ。自分の住む場所が実はそれなりに面白いんだということを再認識することが重要。

県内はどこも行ってみるとめちゃくちゃいいところだ。それに意外と近い。

「癒しの国」日本の温泉が世界から注目され、その中でも「兵庫県の温泉が一番だ」と言われるようになってほしい。

地方に多い廃校跡は工場にしたり、レストランにしたり、沿岸部に多い工業遺産の造船所跡などはジャズを聞ける場所にしたり、アイデア次第でいくらでも新しい使い方は考えられる。

見る観光から
深い体験を
求める観光へ

インスタ映えするスポットを教えあったり、学生がまち歩きをしながら魅力を発信するなど、もっと地域の魅力を共有すべき。

見る観光から、より深い体験を求める観光に変わることは確か。

農業でも、地域によっては、観光農業に振り切って、土地の有効活用をしていくような戦略もあってよい。

I 自分らしく生きられる社会
3 世界へ広がる交流

卒業後も日本にいたい、日本で働きたい、日本のために働きたいという留学生がいるので、その面での国際交流や、県内での国際企業の発展が望まれる。

住民という意味では、兵庫県の人口の中に外国人の人数も含まれているわけだから、この方々が誰一人取り残されない社会をつくらなければならない。

たくさんの国の人たちが地域の産業を支えているという事実があまり知られていない。

世界が
憧れる
県に

海外から来ている、将来母国の科学技術を支える博士研究員などの高度な人材を兵庫で育成するというビジョンがほしい。

技能実習生は1~3年で入れ替わるが、一時的ではあっても市民であることには変わらないので、気持ちよく住んでもらえるようにしないとイケない。

アジアの若いアーティストが集まってくるような、その文化に世界が憧れる兵庫県をめざしてほしい。

I 自分らしく生きられる社会
3 世界へ広がる交流

日本人が外国人を支援するだけでなく、日本人も頼ったり助けられたりして「支え合う」視点が必要。「多文化共生」より一つ手前に「交流」が必要。

立場の違う人
との交流が
大切

外国人と日常的に接触している人ほど排他的な行動を取らないとされる。立場の違う人との交流が寸断されることで、異質なものの、異なる考え方を排除する風潮が強まらないか心配だ。

地域に増加する外国人の方が、違和感なく地域の担い手の一人として必要とされている社会になればいい。

多様な文化の人と混じり合って育つことが大切。

I 自分らしく生きられる社会
3 世界へ広がる交流

常識を壊す体験をすることが大事。多様性に触れる必要があり、その意味でアートや自然、外国人と関わる体験が重要。

世界の一体化が進み、多様な価値観への理解が広がり、アイデアが生まれたり、イノベーションの機運が高まる。そんな未来を望む。

UJIターンの人、海外の人などを混ぜて、ダイバーシティの高い職場を作らないといけない。

多様性に
触れる
体験を

当たり前を疑い、自分の頭で、なぜそうなのかを考える。それがダイバーシティの本質だ。

いろんな価値観を持った人材が混在していないと、地域の持続的な発展は難しい。

世界の情報を知ること、日本のことを知らない外国人と交わることがいかに大事なことを知る必要がある。

I 自分らしく生きられる社会
3 世界へ広がる交流

インドや東欧など伸びつつある地域に行って得た情報を活かすことができれば、先端と伝統が融合した、日本でもトップレベルの産業県になると思う。

国内外との交流によって、県内にプロフィットが生まれるという構造を再度作れないか。そのためには、海外から企業を呼び込む必要があり、閉鎖型ではなく、いろいろなものをオープンな形で進めていく必要がある。

世界に視野を
向けてくれる
プログラムを

海外には若い力がある。今後世界と連携して食糧問題など社会課題を解決するというビジョンも考えられる。

表舞台に出てこないが、世界で活躍している人がいる。そういった人がもっと増えてほしい。世界に視野を向けてくれるプログラムがあればいい。

世界の課題先進国である日本の課題解決のデザインを輸出する発想が大切。意識を少し変えるだけで、課題であったものが、輸出できるものになり得る。

I 自分らしく生きられる社会
3 世界へ広がる交流

日本人の生徒は、外国に興味
がなさすぎる。もっと外国の文化
に興味を持ってほしい。

グローバル社会では、周りの意
見に流されてしまうことが多い
日本人は、どんどん後回しにさ
れてしまう。外国人とコミュニ
ケーションをもっと取れるよう
にすることが大事だ。

海外に出て
新しい体験を

日本人も、世界を知ること
で人生が豊かになる。

海外の学校で学んだり、留学生
を呼んだり、もっと気軽にでき
るようになればいい。

海外に出て新しい体験をするこ
とで自分の価値観が変わり、多
くの選択肢が自分の中にできる。